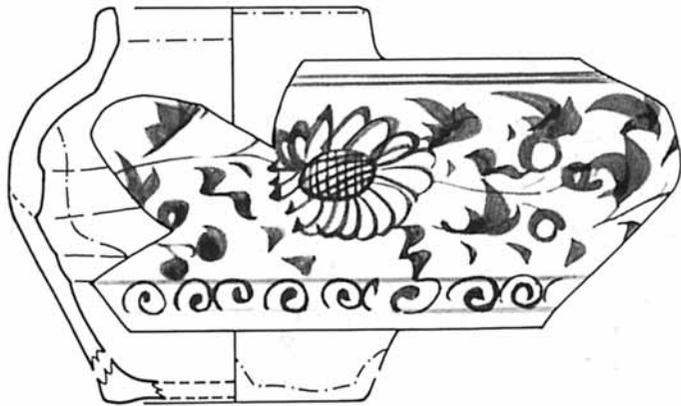


今帰仁村文化財調査報告第9集

今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ



1 9 8 3

沖縄県今帰仁村教育委員会

今帰仁城跡発掘調査報告 I

— 志慶真門郭の調査 —

1 9 8 3

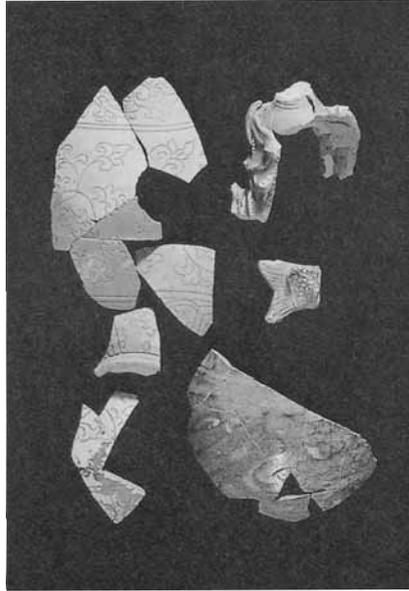
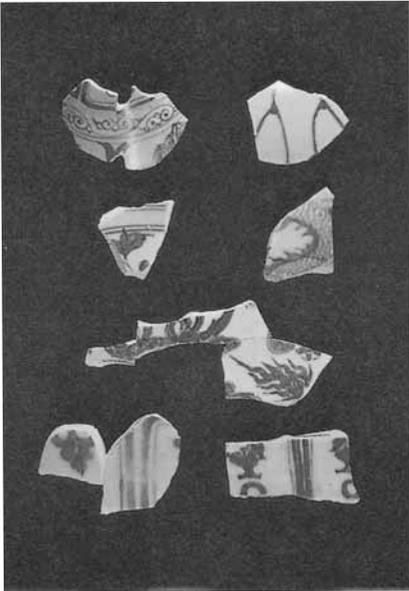
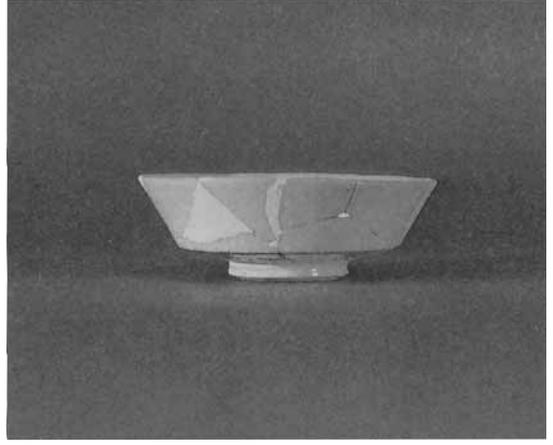
今帰仁村教育委員会



今帰仁城跡全景（右上の城壁内が志慶真門郭）



志慶真門郭（本丸より）



上左：青磁碗
 上右：白磁杯
 中左：元様式青花小壺
 中右：明染付杯
 下左：元様式青花
 下右：緑釉・青磁仏像
 ・三彩

序

本報告書は、史跡今帰仁城跡の保存修理事業に伴う発掘調査の成果をまとめたものです。

調査は第1次調査（志慶真門郭、昭和55年度）、第2次調査（志慶真門郭、昭和56年度）第3・4次調査（志慶真門郭・本丸の一部、昭和57年度）として実施しております。

志慶真門郭を終了、一部本丸地区を終えています。今帰仁城がどのような機能をしていたかといったことはあまり知りませんでした。中国の史書『明実録』に今帰仁城主のことが記され、貿易を行っていたことがわかります。その記事によりますと14世紀後半から15世紀初期にかけてのことです。

これまでの発掘調査の成果から、かつての旧道や石敷道、建物跡などの貴重な遺構が検出され、人々の生活跡が確認されています。

また、多くの中国陶磁器が出土していることから史実関係を裏づけるものでありましよう。

今帰仁城跡の環境整備事業の進行に伴い、多大な成果が得られ村民に多くの希望と期待を与えてくれます。本事業が村の文化振興形成の発展の節目となること、或いはまた、村民の皆さんが歴史を学ぶひとつの手がかりとなるよう願うものであります。

本整備事業を遂行するにあたり、文化庁、奈良国立文化財研究所、沖縄県教育委員会、今帰仁城跡調査研究整備委員会、及び発掘調査にご協力を賜っております関係各位に対して記して感謝を申し上げます。

1983年3月

沖縄県今帰仁村教育委員会

教育長 大城勝三

例 言

1. 本報告は、今帰仁村教育委員会が、国（90％）・県（10％）の補助を受けて、昭和55～57年度に実施した、「史跡今帰仁城跡保存修理事業」における発掘調査の成果を主に収録したものである。
2. 発掘調査、写真測量、資料整理等につきの方々の御指導、御協力を得た。記して謝意を表する。
 田中 琢、佐原 眞、狩野 久、町田 章、沢田 正昭、細見 啓三、山崎 信二、木全 敬藏、伊東 太作、西村 康、光谷 拓実、松本 修自、以上奈良国立文化財研究所
 矢部 良明（東京国立博物館）
 亀井 明德（九州歴史資料館）
 金子 浩昌（早稲田大学考古学研究室）
 大城 逸朗（沖縄県立博物館）
3. 本報告の執筆は下記の四名であたり、文末に文責を記した。なお、陶磁器の分類と本書の編集は金武、宮里があたった。
 金子 浩昌 （早稲田大学考古学研究室）
 金武 正紀 （沖縄県教育委員会文化課主任専門員）
 松田 朝雄 （今帰仁村教育委員会主事）
 宮里 末廣 （ “ ” 非常勤）
4. 資料整理は下記のメンバーで行なった。
 実測・復元作業 宮里 末廣・仲村渠 智・上間 恵子・与那 啓恵・新城 恵子
 神谷 朝子・玉城 成子
 トレース 仲村 美代子
 写真撮影 金武 正紀・松田 朝雄・宮里 末廣
5. 出土遺物は実測図と写真の番号が一致するようにレイアウトした。しかし、一致しないのが若干あり、それらについては明記した。

目 次

第1章 序 言	1
1 調査に至る経緯	1
2 保存と整備	1
3 調査、整備のための委員会	2
4 調査体制	2
第II章 調査概要	3
1 調査地域	3
2 調査経過	3
第III章 遺 跡	5
1 位置と環境	5
2 層 序	5
3 遺 構	6
第IV章 遺 物	9
1 青 磁	9
2 白 磁	56
3 元様式青花	70
4 明染付	73
5 黒釉陶磁	87
6 褐釉陶器	88
7 緑 釉	89
8 三 彩	89
9 翡翠釉	90
10 瑠璃釉	90
11 五 彩	91
12 高麗青磁	91
13 備前焼播鉢	92
14 タイ陶磁	92
15 ベトナム陶磁	93
16 瓦質土器	93
17 瓦	93
18 中世須恵器	94

19	象嵌陶質土器	94
20	土器	94
21	玉類	95
22	遊具	96
23	貨錢	108
24	銅製品	109
25	鉄製品	112
26	石器	116
27	骨製品	119
28	食料残滓（炭化米・麦、貝殻）	130
29	今帰仁城跡志慶真門郭出土の脊椎動物遺骸の概要	131
第V章 総括		133

今帰仁城跡発掘調査報告 I

しげ まじょう — 志慶真門郭の調査 —

第 I 章 序 言

本報告は、俗に志慶真門と呼ばれている郭の発掘調査成果をまとめたものである。城内には10カ所の郭が確認されているが、志慶真門郭は東端の郭である。志慶真門郭の発掘調査が第1次（1980）、第2次（1981）、第3次（1982）と実施された。本報告では、第3次までに検出された遺構、遺物について主に収録した。

1 調査に至る経緯

なきじん
今帰仁城跡は、琉球政府時代の1955年1月25日に記念物、1962年6月7日に建造物としての指定を受け、沖縄の日本復帰と同時に1972年5月15日の文部省告示第58号で国の史跡に指定された沖縄屈指の名城である。明実録には、1383年から1415年までの32年間に帕尼芝王6回、珉王1回、攀安知王11回の中国交易があったと記されている。沖縄の北部全域を支配下に治め、かなりの勢力を持っていたと推測される。この頃は沖縄南部地区を南山、中部地区を中山、北部地区を北山（今帰仁）が支配していたいわゆる三山鼎立時代である。しかし、この鼎立時代も中山の尚巴志によって、1416年に北山が、1429年に南山が滅ぼされて三山が統一される。滅ぼされて後の北山城は、中山から監守が派遣される。いわゆる監守時代で、1665年まで続く。

このような歴史的背景をもつ本城跡を保存していく為に、1977・1978年に「保存管理計画策定」が実施された。計画策定の根幹を成すのが長期に及ぶ環境整備事業の計画である。この計画策定に基づいて1980年から「今帰仁城跡保存修理事業第1次5カ年計画」がスタートした。環境整備事業の一環として発掘調査が実施されている。

2 保存と整備

1979年に外壁内23,401㎡が追加指定されて、指定総面積は78,868.5㎡である。1974・1975年に土地の買上げが行なわれた。城内の字今泊所有地と城門前の民家など数筆以外は買上げが完了している。1979年には、これまで字今泊が管理していたのを、村が管理団体指定を受け、村管理に移すことができた。

総延長約 1.5 km に及ぶ城壁の保存については、「崩壊箇所を修復する程度で、でき得る限り原型のまま保存する」と保存管理計画策定で方針が出されている。石垣の写真測量は奈良国立文化財研究所の協力を得て着々と進められている。

整備は 1982 年から開始された。志慶真門郭で検出された 4 棟の掘建て柱建物跡については、つぎのように整備した。

①柱穴に直径 20cm、長さ 30 cm の塩ビパイプを埋め、その中に直径 15 cm、長さ 50 cm のシイノキの柱を立てる。シイノキは北部地区でよく柱として使用されたものであり、塩ビパイプを埋めてあるので、いつでも抜き替えができる。

②床面は約 20cm 盛土し、その上に厚さ 10cm の琉球石灰岩コーラルを敷き詰める。

③炉跡はコーラルを 5 cm 掘り凹め、レンガを砕いたのを入れて表現する。

また、建物遺構のない所は芝を張り、露頭している岩はそのままにした。 (金武)

3 調査、整備のための委員会

1981年に調査研究整備委員会を発足させ、年 1 回の委員会を開催している。委員は次のとおりである。なお、事業全体については仲野浩（文化庁）、安里嗣淳（県文化課）氏の御指導を得た。

委員長	坪井清足（奈良国立文化財研究所所長）	考古学
副委員長	島尻勝太郎（沖縄大学教授）	歴史学
委員	三好勝彦（海洋博覧会記念公園管理財団理事長）	造園学
〃	岸谷孝一（東京大学工学部教授）	建築工学
〃	安原啓示（奈良国立文化財研究所）	造園学
〃	親泊元高（美里工業高等学校教諭）	建築史
〃	村上仁賢（日本キリスト教団兼次教会）	建築学
〃	松田幸福（今帰仁村村長）	

4 調査体制

第 1 次から第 3 次までの調査関係者は、次のとおりである。

調査責任者	上間政春（今帰仁村教育委員会教育長）	第 1 次、第 2 次
	大城勝三（〃 〃）	第 3 次
調査員	金武正紀（沖縄県教育庁文化課主任専門員）	
〃	岸本義彦（沖縄県教育庁文化課専門員）	第 1 次
〃	玉城朝健（〃 非常勤）	〃
〃	島袋洋（〃 〃）	〃
〃	松田朝雄（今帰仁村教育委員会主事）	
〃	宮里末廣（〃 非常勤）	

第II章 調査概要

1 調査地域

長期計画で進められている今帰仁城跡の発掘調査は、1980年に城内東端の志慶真門郭から開始された。志慶真門郭から開始した理由は、竹や大木が密生（PL₂上）して、ほとんど立入ができない状態であったので、伐開し発掘をして活用したいということと、本丸を支えた周囲の郭がどのような機能を持っていたのかを解明することであった。本郭は約1,700㎡の面積をもち、造成工事で5段の段丘（テラス）に造成されている。南の段丘が最も高く標高約95mで、北の段丘が最も低く約86.80mである。5段の段丘を南から北へ第1区・第2区・第3区・第4区・第5区とした。第1次から第3次までの発掘調査ではほぼ全面を発掘した。

2 調査経過

(1) 第1次発掘調査 (1981年9月1日～同年12月22日)

第1次発掘調査は第2区と第3区B（第3区の西半分）において実施した。発掘前に密生している竹や大木の伐木と抜根にかなり時間を要した。発掘した土は第4区に盛り上げ、それでも納まらない土は城外へ運び出すことにした。第2区の発掘は10月18日に完了した。約20cmの表土層を発掘し、第Ⅱ層からは5cm単位で掘り進めた。第Ⅰ層は遺物が少ないが、第Ⅱ層にはいると中国陶磁を中心に多く検出された。第Ⅲ層は宅地造成のときの客土で、その面で遺構が検出されたので発掘は止めた。10月15・16日に柱穴群全体を確認し、17・18日に柱穴を掘り、建物のプランが明らかとなった。

第3区Bは10月21日から始めた。ここも約20cmの表土層を発掘し、第Ⅱ層からは5cm単位で掘った。ここも第Ⅰ層は遺物が少ないが、第Ⅱ層にはいると多い。11月27・28日で地山面の柱穴群を確認し、12月1日～5日に柱穴を掘って建物のプランが明らかとなった。その後は法面の発掘や遺構撮影、遺構実測等を実施した。

(2) 第2次発掘調査 (1982年9月1日～同年12月24日)

第2次は第4区、第5区（5区の南半分）、第Ⅰ区の発掘調査を実施した。第1次発掘調査で第4区に盛り上げていた土を第2区、第3区Bへ戻す作業から始めた。第4区、第5区の土は第3区Bへ盛り上げることにした。

第4区は第Ⅰ層（表土層）が約20cmで、第Ⅱ層からは5cm単位で掘り進めた。ここでも第Ⅰ層は

I
遺物が少ないが、第Ⅱ層にはいと多量に検出された。第Ⅲ層は宅地造成の客土で、その客土面で柱穴群が検出された。10月24・25日に柱穴を掘り建物のプランが明らかとなった。12月5日からは遣り方を組んで遺構実測にはいる。

第5区は宅地ではない。志慶真門郭で最も低いところで、第1区～第4区に降る雨はすべてこの5区に流れてくる。よって5区は130cmの厚い堆積層を形成していた。5区は幅約4m、長さ約20mの細長い地区で、今回は南半分を発掘した。流されたり、投げ捨てられたりして堆積した層だけに遺物が非常に多い地区である。第5区Aの発掘は10月26日から実施された。ここはⅦ層までであるので、第Ⅱ層からは層ごとに5cm単位で発掘した。第Ⅴ層の土を水洗いして炭化米・麦の検出も同時に進めた。実測は4区と同時に進めた。

第1区も宅地ではない。第1区の発掘は12月4日から始めた。第Ⅰ層約20cmを発掘すると大部分の面は地山や岩盤に達する。第Ⅱ層の存在する所は第2区への法面沿いだけである。この地区は遺物が非常に少なく、建物のあった痕跡はない。大庭（本丸西下の郭で、本丸との法面には本丸へ上る石段がある所）へ上る石畳道と脇門（裏門）への石段などが検出された。

(3) 第3次発掘調査 (1982年8月23日～同年10月27日)

第3次は第6区、第5区、第3区A、第1区法面の発掘調査を実施した。

第6区の発掘から始めた。6区は本丸直下の傾斜地で、生活面ではない。ここは元様式青花など上質の中国陶磁器が多く検出されるが、本丸から投げ捨てられたものであり、これらの遺物は、本丸の報告に含める。6区の発掘で最も大きな成果は、志慶真門郭の北側の石垣を検出したことである。埋まっていた石垣を高さ1.2m、長さ約15m検出した。

9月8日からは第2次で残していた第5区の発掘を始める。第Ⅰ層は約10cmで、第Ⅱ層からは5cm単位で発掘した。Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層は特に遺物が多い。Ⅴ層の土を水洗いして炭化米・麦、魚骨、獣骨などの検出を行なった。地山面の発掘で、大きくて深いピットが石垣に沿って並んでいるのが検出された。この区の層序断面を剥ぎ取りするために東西方向に1本の畦を残した。

9月28日からは第3区A（3区の東半分）の発掘を始める。第Ⅱ層が約35cmで、3区Bよりかなり薄かった。第Ⅱ層は5cm単位で発掘した。10月19日には地山面で柱穴群や炉跡面などが確認され、20日には柱穴、炉跡などを発掘して建物のプランが明らかとなった。なお、第3区から第4区へ降りる石段も検出された。10月21日からは遣り方を組んで遺構実測にはいった。

10月21日からは第1区と第2区間の法面の発掘を始める。法面の発掘で石畳道が検出された。この道は1区で検出された石畳道へ繋がる。遺物は非常に少ない。

10月27日には志慶真門郭の発掘を完了し、10月29日からは本丸（第4次）の発掘へと移った。

(金武)

第Ⅲ章 遺 跡

1 位置と環境

今帰仁城跡は沖縄本島、本部半島東側の今帰仁村字今泊ハンタ原地内に所在する。城跡は今泊部落より南側約1kmのところ、標高約80～100mの丘陵上に築かれている。付近の地形は丘陵が多く、東側の深い谷間を志慶真川が蛇行している。水量は年間を通して豊である。北側はゆるやかな段丘状の地形を示しながら海岸線近くで砂地の平坦地となり、そこに今泊部落が形成されている。海岸から沖合いにかけては遠浅となり、途中でラグーンが発達し、内海と外海の隔たりを持つ好漁場となる。西側は城門前面部でゆるやかな段丘を示している。南側は数々の連山が連なる自然環境になっている。城跡のある丘陵及び南の連山は古生紀の石灰岩の石山で、城壁の石積み材料も同石灰岩である。

城跡は、大隅、ウーチ原、本丸、ウミヤー、志慶真門、カーザフ、ハラクブなど呼称される郭で成り立っている。それらを取り巻くようにして外壁の石垣が北側から西側へ、さらに南側へと廻らされている。外壁の北側段丘地形には集落跡をうかがわせる石積み遺構や、それと関連すると思われる石塁などがある。また、支城ではないかと言われている「ミームングスク」や「ターラグスク」などもある。
(松田)

2 層 序

宅地造成が二度行なわれていること、段丘上に造成されているために雨で遺物が流されたこと、本丸からかなりの遺物が投げ捨てられたこと、何度も建物が建て替えられたこと、さらに伐木が何度か行なわれたことなどの条件で遺物がかなり動いており、遺物の層序的把握は困難である。ただ、第4区Ⅱ15～30cmと第5区Ⅳ層30cm以下はあまり動いていないと考えられる。

(1) 第1区

第Ⅰ層は暗褐色土で約20cm。第Ⅱ層は黒褐色土で、全面には広がってなく、法面沿いに5～10cmの厚さで検出された。第1区は遺物が非常に少なく、道として使用した段丘である。

(2) 第2区

第Ⅰ層は暗褐色土で約20cm。第Ⅱ層はオリーブ褐色土で約60cm。第Ⅲ層は宅地造成で客土された黄褐色土である。第Ⅰ層は遺物が少ない。しかし、出土陶磁の中では明染付が約40%を占めている。

第Ⅱ層の0～40までは明染付や線刻細蓮弁文青磁碗などが多いが、40～60では非常に減少している。

(3) 第3区A(3区東)

第Ⅰ層は暗褐色土で約20cm。第Ⅱ層はオリーブ褐色で約30cm。第Ⅲ層は黄褐色の地山である。第Ⅰ層は遺物が非常に少ない。第Ⅱ層で明染付や線刻細蓮弁文青磁碗の出土状況は、0～15cmに比べて15～30cmでは非常に少ない。

(4) 第3区B(3区西)

第Ⅰ層は暗褐色土で約20cm。第Ⅱ層はオリーブ褐色土で約60cm。第Ⅲ層は黄褐色土の地山である。地山直上で炭化麦が集中して検出された。3区Bは5区に次いで遺物の多い地区である。第Ⅰ層、第Ⅱ層0～40cmまでは明染付が多いが、40～60cmではわずかに2片である。しかし、線刻細蓮弁文青磁碗は40片も検出されている。

(5) 第4区

第Ⅰ層は暗褐色土で約20cm。第Ⅱ層はオリーブ褐色土で約30cm、第Ⅲ層は宅地造成の客土で黄褐色を呈する。この客土の下に黒褐色土があって、口禿の白磁皿がかなり検出されることが確認されたが、遺構保存のために発掘を広げなかった。この4区の第Ⅱ層15～30cmは線刻細蓮弁文青磁碗が1片も検出されてなく、明染付もわずか3片だけ検出されていることからあまり動いてない層だと考えられる。

(6) 第5区

第Ⅰ層は暗褐色土で約10cm。第Ⅱ層はオリーブ褐色土で約20cm。第Ⅲ層は暗褐色土で約20cm。第Ⅳ層はオリーブ褐色土で約45cm。第Ⅴ層は黒褐色土で約10cm。第Ⅵ層は黒黄褐色土で約10cm。第Ⅶ層は黒褐色土で約10cm。第Ⅷ層は黄褐色土の地山である。Ⅴ層とⅥ層はレンズ状に堆積している層で、西側では見られない。なお、Ⅴ層は炭化米・麦が多量に混入する層である。5区は最も遺物が多く検出された。第Ⅳ層30cm以下Ⅶ層までは明染付が1片も検出されてなく、線刻細蓮弁文青磁碗もわずか5片だけであり、あまり動いていない層だと考えられる。 (金武)

3 遺 構

第3次までの発掘調査で宅地造成、石垣の基礎、石畳や石段の道、掘建て柱建物跡などの遺構が検出された。これらの遺構の検出で志慶真郭がかなり構造的、機能的に把握できた。

(1) 宅地造成

志慶真門郭内は南から北へとかなり傾斜した地形で、そこを削ったり埋めたりして5段の段丘（テラス）に造成している。第1区はもとの地形である。第2区は第1区を削って一段下げ、第3区との間の法面は土留めの石積み（約1.3m）をし、中に土を入れて宅地に造成している。第3区は地山面をある程度削って平坦にし、第4区との間の法面には土留めの石積み（約30cm）がなされている。第4区は西から東へとかなり傾斜している地形で、北と東（5区との境）に土留めの石積み（約90～120cm）をし、その中に土を入れて宅地に造成している。ここの土留め石積みは大きな石を使って丁寧に積み上げられている。宅地は土留め石積みのある方向へ若干傾斜しており、排水が考えられる。このように造成された宅地で、屋敷として建物が建つのは第2・3・4区だけである。なお、この造成の前に古い造成があることも確認された。第1区だけを削って2・3・4区が区画なしに一つの平場として造成されている。それは第2区の土留め石積みの下に柱穴が確認されたこと、第2区と第4区の客土の下に古い遺物（14世紀前・中葉）が検出されることで理解できる。

(2) 志慶真門郭内の道

第1区から第4区までの土留め法面には石段があり、これらの石段は第1区の石畳道へ繋がっている。第1区の石畳道は大庭を通して本丸へと繋がっている。このように志慶真門郭は石段や石畳道で本丸と結ばれていることが確認できた。なお、第4区の東法面沿いに第3区の石段まで石敷の道と考えられる遺構が検出されたが、2・3区では確認できなかった。石畳や石畳道については、1区がPL.5上。2区の石段がPL.8上。3区の石段がPL.9上。4区の石段と石敷き道がPL.10下。

(3) 掘建て柱建物跡

宅地造成のあとで2・3・4区には掘建て柱の建物が建てられている。しかし、柱穴が無数にあり（PL.7）、何回も建て替えられたと考えられる。無数の柱穴群の中で、建物のプランが確認できるのは4棟である。なお、瓦がほとんど検出されないことから、瓦葺の建物ではなかったと考えられる。また、床については明らかではないが、炉については戦前まで土間に地炉を設けた民家が北部地区に残っていたと言われている。

第2区の掘建て柱建物は約6m×約4mで、周囲に18本の柱を廻らす。ほぼ中央には約15cm掘り込んだ円形の炉跡も検出された。柱穴には楔石があり、柱を固定していたことが理解できる。柱穴は口径25～40cmで、深さは30～50cmである。なお第2区には2つの土壙が検出された。2号土壙は口径約1.5m、深さ約130cmの円形土壙で、牛・馬骨が多く検出された。陶磁器はわずかに検出された。1号土壙は長径約2m、深さ60cmの楕円形状の土壙である。これらの土壙が何に使用されたものかは明らかでない。

第3区では2つの掘建て柱建物が確認できた。3号(3区西半分。P.L. 7下)は約7m×約6mで、周囲に18本の柱が廻り、中に1列に8本が並んでいる。北側には約20cm掘り込んだ楕円形状の炉跡が検出された。地山(黄褐色土)に柱穴を掘っているので、掘った穴の大きさと、柱の太さが確認された。柱穴は口径30~40cm、深さ30~50cmで、直径5cm前後の柱を建てていたようである。

2号(3区東半分。P.L. 9上下)は約6m×約6mで、周囲に13本の柱を廻らし、中に2本の柱が並んでいる。東北すみには約25cm掘り込んだ円形の炉跡が検出された。柱穴は口径30~40cm、深さ30~50cmで楔石がよく残っていた。この3区の二つの建物は、中に一列の柱穴が並び、炉跡が北東側に寄っているなどの共通性があり、同時期の建物と考えられる。

第4区の掘建て柱建物(P.L. 10下)は約5m×約5mで、周囲に13本の柱穴が廻る方形の建物である。ほぼ中央には約20cm掘り込んだ円形の炉跡が検出された。この建物は、ほぼ中央に炉跡があり、中に柱がみられないことなどで、第2区の建物と共通する。この二つの建物はほぼ同時期と考えられる。

(4) 城 壁

第5区は130cmも土が堆積して石垣の最下部については不明であったが、発掘で石垣の最下部を検出した。石垣は地山面を地ならしして、その上に直接積み上げていることが確認できた。根石を強化するために穴を掘って埋めているかと考えていたがそうではなかった。このことは第6区の北側石垣でも確認された。北側石垣はかなり急傾斜の地形に礫を敷いて平坦(外側は礫敷き面まで基礎積みされていると考えられる)にし、その上にそのまま積み上げられている。石垣は下部では大きな石を用い、上へとだんだん小さい石を使用している。第5区で石垣に沿って口径約50cm、深さ約50cmの大きなピットが並んで検出されたが、それは石積みと関係のあるピットではなかろうか。

(金武)